

3 特任助教に就任して

南 友二郎 (同志社大学研究開発推進機構及び社会学部特別任用助教)



長きにわたる耐震工事を終えた新町キャンパスで満開になった桜は、剪定されたのか、どことなくいつもの迫力に欠けるような印象を私に与えました。それは、同志社大学における6回目の春を特別任用助教として迎えることができた私にとって、

変わっていないはずの場所にいつつも、これまでとは違う新しい世界に足を踏み入れたことを象徴するような出来事でした。

中軽度の障害児者による社会参加の深化方法について、より深い学びを得たいと思い、飛び込んだ同志社大学大学院は、一介の介護福祉士であった5年前の私にとって、そびえ立つ摩天楼のような異空間でした。咲き誇る桜を前に、不安だけが胸に去来し、その美しさを見上げるばかりであったことを、今なお鮮明に覚えています。

「しんどくても、嫌なことがあっても、頑張っていたら先に絶対何かいいことがある。」とは私の母の教えです。また高校時代の恩師は「一生懸命なら誰でもできる。やりたいことを実現するために、時に人間は必死になってやらないといけない」と私を今でも諭してください。人間は不幸なことほど、記憶にとどめておく習性があるようです。大学院での5年間、しんどかったことや嫌な思いをしたこと、我慢をしなければいけなかったことなど、ネガティブなことのほうが思い起こされます。それでも必死に走り続け、頑張り続けた、博士学位を取得するまでの5年間は、これまでの人生を基盤に、新たな自分を創造する営みであったのかも知れません。

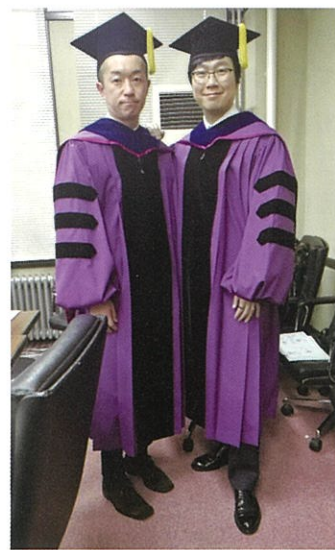
その先にある博士学位の取得そして教員としての着任という1つの分岐点を迎えた今、教育者としてあるいは研究者として何に対しての闘いを、自分自身が今後していくべきなのかについて、ふと考えることがあります。その答えは着任一カ月もたたない今、出るわけがありません。しかし、そのヒントになる出来事が

最近ありました。

それは、先日私用のため向かった、大阪の北浜駅周辺地下道で遭遇した朝のラッシュアワーでのことでした。スーツなどのビジネススタイルに身を包んだ多くの方々が、会社等への道のりを急いでおられました。その表情は一様に引き締まっており、今日すべきことを頭に浮かべながら、(多くの場合) 営利追求の場という闘いの場へと向かうにふさわしいものでした。しかし私はその時、「あ、違う」と直感的に感じたのです。何が違うのかと言えば、追求するものが違うのだと思いました。

ただ、生活上の困難を抱えた人への支援に関する実践方法論の提示ということは、抽象的に過ぎます。それは私にとって、一生をかけて目指すべきことであり、到達すべき領域だと言えるのかもしれませんが、では、その大きな到達点にたどり着くためのファーストステップとして、今の私に何ができるのでしょうか。それは何より、与えていただいた教員としての機会を活かしながら、博士論文で明らかにしたことの次を、地道にそして誠実に、一步一步踏みしめながら探求していくことだと考えています。

指導教授である上野谷加代子先生からは、「すべきこと」「やりたいこと」そして「できること」のバランスを常に考えながら歩を進めることの重要性について、日々ご教示いただきました。学内副査である埋橋孝文先生からは、禁欲的に研究を推進することおよび自身の主張を強く押し出す必要性について説いていただきました。学外副査の齊藤弥生先生(大阪大学)からは、自身の信念からブレずに事を前に進める姿勢を学ばせていただきました。また、博士課程教育リーディングプログラム「グローバル・リソース・マネジメント」履修に際しては、木原活信先生からも貴



重なアドバイスを頂戴しました。先生方からの金言を無駄にすることのないよう、今後とも精進していく所存です。

そうした中、現在の私が恵まれていることは、院生時代をともに過ごした戦友たちが、今なお学内に多くいることです。郭芳先生、李彦尚先生、姜民護先生、田中弘美先生、任貞美さんとは、今後も愚痴を言い合いつつ、教育・研究の場で切磋琢磨していければと思います。皆さん、どうぞお手柔らかにお願いします。

厚生労働省によれば、2015年における男性の平均寿命は80.75歳とのことです。既に私はその折り返し地点を過ぎています。そう考えると、「あなたは年をとっ

ているから、人の倍書いてちょうどのよ。」という神の声が、今にも聞こえてきそうな気がします。弱音を吐くようですが、私はこれまでの5年間走り続けてきました。ですので、本当は少し腰を落着けた生活を営みたいと思っはみるのですが、現実はどうもまいかないようです。自分らしく、自分なりに、しかし自分を大切にしながら、生活上の困難を抱えた人への支援に関する実践方法論の提示に向け、教育・研究という新たな闘いの場で努力と学びを重ねていきたいと考えています。「この道より我を生かす道なし。この道を歩く」(武者小路実篤)

4 特任助教に就任して

田中 弘美 (同志社大学研究開発推進機構及び社会学部特別任用助教)



2017年3月21日、春雨の降る学位授与式において、博士の学位を取得することができました。ここまで導いてくださった主査の埋橋孝文先生、副査の木原活信先生、ご多忙なか学外副査を引き受けてくださった京都大学の落合恵美子先生に、

改めて感謝申し上げます。また、立命館大学の深澤敦先生には、学部時代からお世話になり、博士課程への進学について相談した際には、最後の一步をふみ出しかねていた私の背中を押してください、これまでずっと支えてくださったことに、心から御礼申し上げます。

2013年4月に大学院の博士後期課程に入学してから、4年間の研究を経て、博士論文『稼得とケアの調和モデル』の実現に向けて「国際比較と移行経路」を執筆しました。この4年間で振り返ると、確かに良いときも悪いときもあったのだろうと思います。しかし今となってはあまり覚えていません。後ろをふり返る余裕もなく、とにかく少しでも前に進むという気持ちで走ってきたのかもしれませんが。ただ単に、過去のことをあまり気に留めない性格というだけの可能性もありますが…。

そんな私ですが、博士課程の研究を進めるにあたって心がけてきたことが3つあります。せっかくこのような機会をいただいたので、備忘録的に記しておきたいと思います。まず第1に、周りの人の批判的コメントに真摯に向き合うことです。研究者としては当然のことではありますが、研ぎ澄まされた刃のようなコメントが来たときには、つい逃げたくなってしまいます。そんなことも多々ありましたが、他人の研究に対して時間と労力を割いてくださったことに純粋に感謝し、どのようなコメントにも自分なりに向き合うことを心がけました。そうしたコメントのおかげで研究は進展しました。私の博士論文の大部分は、みなさまからいただいたコメントで成り立っていると云っても過言ではないと思います。

第2に、国内外の学会などに出向いて積極的に発表することです。博士2、3年目は、幸運にも学振特別研究員(DC2)の助成を受けられたため、韓国、ハワイ、イギリス、デンマークなどで発表しました。勇気を出して出て行くことで得るものがたくさんありました。特に、憧れの研究者であるDiane Sainsbury先生や、Ito Peng先生が私の研究に対してコメントしてくださったことが心に残っています。また、同世代の若手研究者とも交流することができました。私は普段からおひとりさま行動が苦ではないほうですが、特にこうした場所には1人で行くことを心がけていました。そうすると、行った場所で必ず1人は新しい友達